籠に収納された状態で出土した朱塗りの椀。
来客や行事用であった可能性が高い。

灰が入った状態のままで見つかった香炉。

お歯黒水を作ろうとしたものと思われる
錆びた鉄片が入っていたお椀。

内側に茶葉が残っていた茶釜。当時の日常的なお茶が
煮出して飲むものであったことがわかる。

発掘最新情報 01

日常の生活が垣間見える

暮らしの道具・生活品

通常、発掘作業により見つかる遺物は廃棄されたものがほとんどですが、天明泥流被災遺跡の場合、被災直前、つまり泥流に襲われるその瞬間まで実際に使われていたものがそのまま存在するという点が特徴的です。陶磁器のほか、漆を塗られたお椀なども保存状態がよく、また煮出した茶葉が付着した茶釜、灰が入ったままの香炉などは、被災する直前までの当時の日常的な暮らしの様子を生々しく伝えています。

（上）西宮遺跡から発掘された建物。建築部材や生活用具が良好な状態で残っていた。（右上）石川原遺跡で見つかった蔵を持つ大きな屋敷。（右下）西宮遺跡の発掘風景。

vol. 35

最新発掘から見えてきた江戸時代の暮らし

［ 長野原町の天明3年浅間噴火遺跡＜2＞ ］

1783年、浅間山噴火により発生した＜天明泥流＞が、
吾妻川沿いの村々を襲い、一瞬にして埋め尽くしました。
昨年秋まで行われてきた八ッ場ダム建設にともなう発掘では、
泥流の堆積物の下から江戸時代の集落や
そこでの暮らしの様子がそっくり姿を現し、
当時の生活を知る貴重な手がかりとして注目を集めています。

タイムカプセルを開くように泥流下から現れた当時の村々

長野原町内の天明の噴火による泥流の被害といえば、平成29年8月号の当コーナーにて旧新井村・坪井村などの歴史を取り上げましたが、今回の八ッ場ダム建設に伴う発掘により、さらに吾妻川下流の横壁・林・川原湯・川原畑地区などからも多くの遺跡が発見されました。なかでも、現在の川原畑地区にあたる東宮・西宮遺跡、川原湯地区の石川原遺跡からは、天明泥流により埋没した数多くの屋敷、幹線道路、井戸や水路、広大な畑などが見つかり、また屋敷や寺院の跡からは当時の生活用具や仏具などが驚くほど良好な状態で発見されています。

発掘を担当した（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団・藤巻幸男八ッ場ダム調査事務所長は、次のように話します。

「これらの遺跡の最大の特徴は、噴火による泥流という突発的な出来事により、当時の村やそこでの暮らしといった日常的な状態がストップウォッチで停止させたかのようにそのままの姿で残されていることです。場所によっては3メートル近くもある分厚い泥流の堆積物が村々を覆ったことで、通常なら腐って消えてしまう木製の建築材や生活用品なども残されており、これらは全国的に見ても、江戸時代の暮らしを知る大変貴重な手がかりとなります」

〈天明泥流〉という地域の物語に耳を傾け、語り継ぐ

現地での発掘作業が終わったばかりで、本格的な調査・研究はこれからとなりますが、発掘時点で見えてきた特徴のひとつとして、藤巻所長は土地の利用法を挙げます。「当時も今も、村（集落）のあった位置はほとんど変わらないのですが、特筆すべきは高台の平地だけでなく川沿いの低い土地もくまなく畑として使っていること。幅35㎝ほどの間隔の細めの畝の畑が広大に耕作されていました。これらは麻を栽培した畑ではないかと推測されますが、まだはっきりしたことはわかりません」

また、東宮・西宮遺跡では何ヶ所かの井戸が発見されたのに対して、対岸の石川原遺跡のほうでは井戸はひとつも見つからず、代わりによく整備された水路の跡が見つかるといった、村ごとの共同体としての生活様式の違いも興味深い発見です。

遺跡からは、被災後の当時の人々の復旧作業の様子も見て取れます。泥流に埋まった部分を掘り下げ、元の畑の土を掘り返し、ふたたび畑として使用した「天地返し」の跡はそこここで見られます。押し潰された家のなかから重たい石臼だけを取り出して持ち出した跡などもわかっているそうです。

このように、私たちの足もとにはおよそ240年前の人びとの暮らしがまるごと残されていたことがわかってきました。それらの多くはふたたびダム湖へと沈みますが、私たち住民は、国内の火山災害の事例でも類を見ない「天明泥流」という出来事に遭遇した祖先の人びとの〈物語〉に耳を傾け、語り継いでいく必要があるのではないでしょうか。

開催中 江戸時代の天明泥流に被災した村

今回紹介した遺物など、最新の発掘調査成果が展示されています。ぜひこの機会に実物をご覧ください！

期　間　令和2年4月12日まで
場　所　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
　　発掘情報館（渋川市北橋町）

◎今回紹介したのは…

長野原町の天明３年浅間噴火遺跡

参考資料：「江戸時代の天明泥流に被災した村」展示資料、
「遺跡は今」（平成29年度八ッ場ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要）

取材協力・写真提供：公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

土間＋土座の建物（梁間2間～）

土間＋板間＋板間の建物（梁間3間）

土間＋板間2部屋以上の大きな建物
（梁間3間半以上）

発掘最新情報 02

さまざまなタイプが混在していた

住居・建物

江戸時代当時のこの地域の住居がどういったものであったかは、実はあまり解明されていません。今回の発掘調査では、母屋や蔵など数多くの建物が発見され、掘立柱建物（地面に直接柱を立てたもの）から礎石を敷いた土台建物まで、様々な住居が同時に存在していたことがわかってきました。母屋の例の一部を写真で紹介します。

発掘最新情報 03

生業から共同体のあり方まで

集落のかたち

延べ面積 100 万平方メートルという広大な範囲で行われた発掘からは、個々の住居だけでなく畑や道など集落の全体の姿もある程度見ることができます。水田のないかわりに、おそらく地区全体で生産に関わっていたのではないかと思われる同種の畑の作物がなんだったのかは、これからの研究での解明が待たれます。住居のまわりに積まれた薪などからも、当時の景観を思い浮かべることができます。

一定の畝の間隔で広範囲に広がる畑の跡。

（左）石川原遺跡から発見された水路。（中央）家の裏手に積まれていた薪。
（右）被災後、臼だけを掘り出して持ち出した跡。

ふるさと再発見

［35］
―文化財だより―

【幻の不動院】②

天明の泥流により押し流された観音堂は、被害にあわなかった川原湯温泉地区の中原に享和２（１８０２）年再建される。しかし明治初めの廃仏毀釈により建物や仏具は破棄される。残された石造物の中に衣一つで助かった不動院住職が建立したと思われる供養塔と無縫塔がある。

供養塔には「有縁無縁三界萬霊供養　天明三年卯七月八日浅間荒古碑流失依而造立之者」とあり多くの古碑が人命とともに流失したことがわかる。また無縫塔には「大阿闍梨堅者法印亮義大和尚位　宝暦五（１７５５）年亥二月八日遷化　不動院先代石塔浅間山泥押之節流失」と刻まれている。不動院の創建は定かではないが、亮義が不動院の隆盛に大きく貢献した人物だったことが推測される。不動堂の石灯篭（享保６（１７２１）年）、大日如来石像（享保６年）、川原湯神社の庚申塔（寛保１（１７４１）年）に亮義の名前が残されている。

次回は**【幻の不動院③】**を紹介します。

［左］無縫塔［右］万霊供養塔（川原湯神社前個人墓内）